

2016年3月6日

福音書からのメッセージ

だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。

(ルカによる福音書 15章 32節)

今日の物語の中で、父から分けられた財産を使い果たし、空腹のあまり豚の餌までも食べようとした弟は、父の元に戻ることを決心します。もしあなたがお父さんの立場だったらどうしますか。当時の社会において、生前の父親から財産を相続することはありません。それは、父との関係を断つことを意味していたのです。そのような息子がノコノコと帰ってくる。ちょっとやさしく許してやれないと思うのが普通ではないでしょうか。

しかしこの父親は違います。父親は遠く離れている息子を見つけて、走り寄ります。息子は手紙などで予告して帰ってきたわけではありません。ということは、この父親はいつも待っていたのです。きっと今日こそは帰ってくる、あの向こうの山から息子は必ず帰ってくる、そのことだけを信じて待っていたのではないのでしょうか。

息子は父親との関係を断って出て行きました。しかし父親は息子を待ち続けます。これがわたしたちと神さまとの関係です。そして弟の謝罪の言葉を聞くよりも前に、無条件に家の中に受け入れたのです。

わたしたちは何度となく神さまから離れます。しかし、いつだって神さまは受け入れてくれます。それはわたしたちが反省したからでも、自分の行いを悔い改めたからでもありません。もう一度神さまに向き直ろうと思い、離れていた手をもう一度握りしめようとした、それだけなのです。神さま、あなたが必要です、その思いだけで、



神さまはわたしたちを受け入れてくれたのです。

わたしたちと神さまとは

どのようにつながっているのでしょうか。例えば誰かがおぼれていたとします。必死でその人が手を差しだしてくる。あなたは岸辺からその人の手を掴みます。どこを握るでしょう。手の平どうしでしょうか。でもそれだったら、どちらかが力を抜くと、すぐに離れていってしまいます。

相手の手首を握るのです。そして相手に自分の手首を握らせる。すると片方の人が手を離したって、その手が離れることはありません。神さまとわたしたちの関係は、そのようなものです。神さまはしっかりとわたしたちの手首を握って離さない。たとえわたしたちが神さまから離れようとしても、その手を離して自分で生きていこうとしても、神さまはわたしたちの手首を握りしめたまま、ずっと待っていてくださる。わたしたちが再び神さまに心に向け、その手を握りしめるその日が来るのを、じっと待ち続けてくださるのです。

これが神さまの愛です。わたしたち一人一人を大切に思ってください。それが神さまなのです。

桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町 184

TEL/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>